



社会福祉法人いわき福音協会

会 報

第15号
2009. 3. 5

発行責任：いわき福音協会広報委員会 ☎0246-23-1903
住 所：福島県いわき市平上平窪字羽黒40-44

『困難と問題を互いに負い合いなさい』

ガラテア人への手紙6章2節(NLT)

いわき福音協会理事長 海野 洋

ここ数年の間に、国は福祉に対する考え方、施策を大きく転換した。

特に、施設生活に長く止まる現状を改善し、地域住民として共に生きるを促す改革であった。そのために、選択できる様々な福祉サービスを提供して、自立支援法が制定されたものである。

私達も、こうした改革に沿って地域への移行を進めているが、彼等の地域生活での定着を考えると、ためらいもあり少し心配もある。

その一つはやはり働く場の確保の困難さにある。関係機関を始めとして、関係者の方々の真剣な対応や努力をいただいているが、このところの派遣切りにも見られる様に、就労環境は予想以上の厳しさにある。

私達にしても、できるだけ自給自足に知恵を絞って、彼等の働く機会を増やしたいと思っている。その一方で、就労支援としての「ハート購入法」(国や自治体等が優先的に仕事の発注を促す)による

受注を積極的に利用し、確かな安定支援に繋ぎたいと思っている。

さて、今年の標語は「困難と問題を互いに負い合いなさい」ガラテア人への手紙6章2節(NLT)とした。

今、まさに福祉は困難な時代を迎えている。その困難を乗り越えるためにも、我々一人ひとりの成長は欠かせない。言葉を換えれば、福祉の変化をしっかりと捉え、状況を判断する力をつけることにあろう。この成長がなければ私達の働きは認められず、何よりも福祉に対する責任を果たすことは出来ない。

長い間、措置費の中で利用者の幸せを考えていけば良い時代であった。しかし当事者の権利、或いは、自由意志からの自立を支えることが、私達の働きとなっただけに、以前の施設での限られた範囲での福祉とは、明らかに異なる状況になっている。

こうした変化に私達は素早い適応を求められており、その変化に対する遅れは、間違

いなく経営の危機を招くことになる。他力依存は許されず、自らの存続を願うとすれば、一人ひとりが、しっかりと状況の変化に目を凝らす必要がある。

この認識のうえで、私達は高まる福祉需要に対し、専門職として何をなすべきか、そして何が求められているのか、自らの存在価値を失わないためにも、よくよく現状を把握し、認識しなければならぬ。

改革によって福祉概念も変わってきた。しかし聖書は、時代がどう変り、どんなに厳しい試練に見舞われても、うろたえたり驚いてはならず、互いに重荷を負うべきとし

ている。

この法人は神との歩調なしにはあり得ない。その根底にあるのは、障害ある者の痛み、家族や関係者の痛み、どこだけ共感できるかにある。こうした神に添って歩んできたことが、半世紀以上の厳しい困難を乗り越えられた証とも言える。

そのことを覚えながら、法人の働きが「神によって成されている」ことを確認しつつの今年でありたいと思う。



「新年のつどい」年頭挨拶

社会福祉法人 いわき福音協会の事業内容

1. 平成20年1月からの動き(変更点)

平成20年6月…グループホーム利用者の増加に伴い、職員数も増えたため、支援センターふくいんの事務所をいわき市平堂の前に移す。

平成20年6月…ホームヘルプステーション シャロームの事務所を支援センターふくいん内に移す。

平成20年11月…就労継続支援事業所を設置するため、障害者自立支援対策臨時特例基金補助を受け、いわき市好間町下好間地内の建物を改修する。また、同補助事業により、はまぎく荘浴室改修工事及びはまなす荘ハウス設置工事を行う。

平成21年1月…就労継続支援B型事業所「かがやき」開設

2. 障害者自立支援法施行に伴う、新体系事業への移行計画について

平成21年4月移行予定

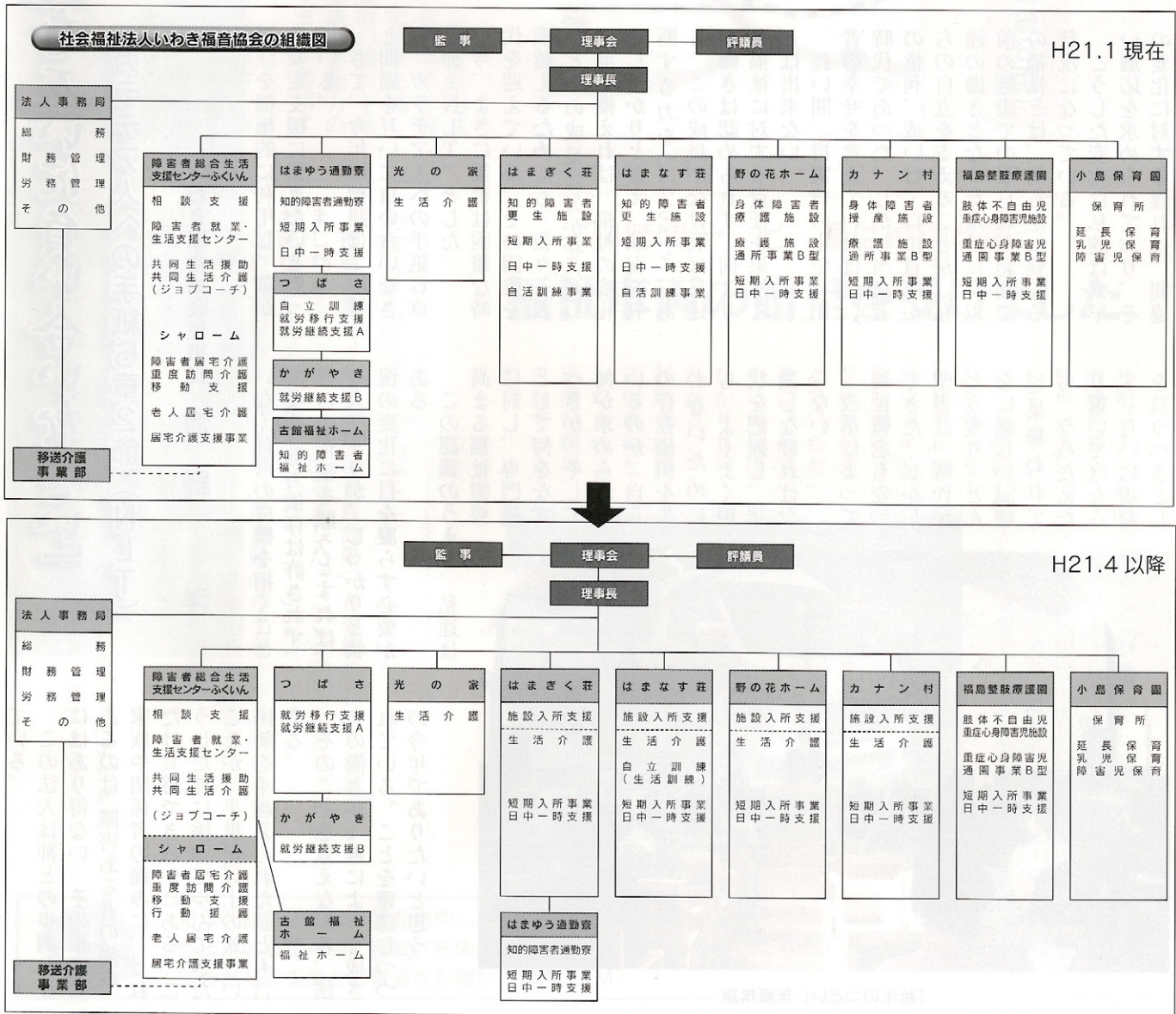
施設・事業名	移行予定事業名
身体障害者療護施設 野の花ホーム	生活介護 定員54名
身体障害者授産施設 カナン村	生活介護 定員40名
知的障害者更生施設 はまなす荘	生活介護 定員34名 自立訓練 定員40名
知的障害者更生施設 はまぎく荘	生活介護 定員40名
施設入所支援	夜間支援
施設入所支援 定員50名	日中支援
施設入所支援 定員40名	
施設入所支援 定員50名	
施設入所支援 定員40名	
施設入所支援 定員40名	
施設入所支援 定員40名	

* はまなす荘の施設入所支援の利用定員については、平成21年4月には65名で開始し、平成21年10月に50名とする。

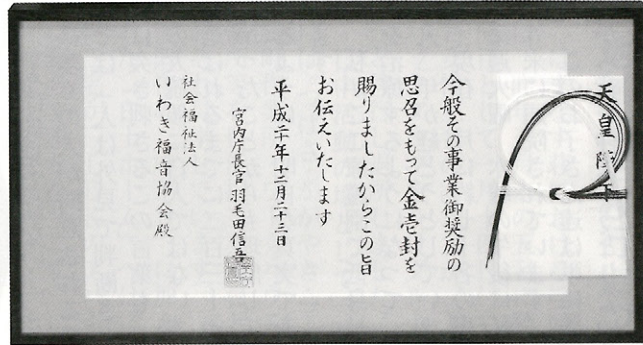
* はまぎく荘の施設入所支援の利用定員については、平成21年4月には65名で開始し、平成21年10月に50名とする。

* はまぎく荘の施設入所支援の利用定員については、平成21年4月には65名で開始し、平成21年10月に50名とする。

以降に新体系事業に移行する。



天皇陛下から御下賜金を賜りました



優良民間社会福祉事業施設・団体への天皇陛下御下賜金の対象施設に当法人が選ばれ、昨年12月26日県庁で行われた御下賜金の伝達式で、佐藤雄平福島県知事から理事長に御下賜金が手渡されました。

今日まで当法人をご支援・ご指導して下さいましたすべての方々に感謝申し上げます。ありがとうございます。

当法人は、この名誉に恥えるよう今後も地域の障害者(児)の支援と福祉向上のために職員一丸となって邁進していききたいと思っております。

なお、当法人では、昭和32年4月に福島整肢療護園が、昭和43年4月に小島保育園が天皇陛下御下賜金を賜っています。



感染予防対策委員会の立ち上げ



昨年暮れからインフルエンザ流行のニュースが流れ各施設毎に対応していますが、昨今新型インフルエンザに対して行政、企業においても、その対策・行動計画等についての検討がされているようです。
当法人も法人として対応していく必要があるためインフルエンザを含めた感染症に対する方策検討の委員会を立ち上げました。今後益々施設毎の対応でなく法人としていかに対応していくかが問われますので委員の方々にしっかりと検討して頂きたいと思っております。

保育所 小島保育園

小島保育園には、各年齢ごとの保育室のほかに、二階に多目的ホールがあります。名前のとおり、日ごろより、いろいろと活用しております。年に三回の人形劇鑑賞では、劇場として使います。園児ばかりでなく、地域の未就園児親子も案内を通して参加していただいております。

各学年ごとに行われる育児講座及び懇談会でも広く使われます。写真左二枚は、九月に行われた、一歳児組の親子リズム遊びの様子です。広いホールの空間を十分利用して、親子のスキンシップを図り楽しいひと時を過ごしていただきました。保育士から、日ごろの生活の様子などもプロジェクトの映像を通して伝えられ、保育内容についてもご理解いただく機会になりました。



会などの行事でも会場として使われます。
子どもたちが多く使うのは、雨天や風の強い日など、園庭が使えない日です。日ごろより、保育活動の中に外遊びを積極的に取り入れていたため、天候の悪い日が続く室内活動が続くと、イライラする子が見受けられます。そんな時は、ホールに行つて、楽しい音楽を掛けて発散します。体を動かしたり、大きな声を出すことで、ストレスも吹き飛びます。(保育者も)
昭和五十一年建築時は、三歳以上児が大半を占めていた入園児も近年は、三歳未満児が半数を占めるようになりました。低年齢児が遊び場として使用するホールの床の固さが気になってきたところ、福島県共同募金会より助成していただけることとなり、平成二十年十一月に床の張替え工事を行う事ができました。
床にクッション材を敷いたことで、以前のコンクリートの冷たさがなくなり、子どもたちも快適に過ごしております。冬の寒さが厳しくなる前に、工事が完了したことで、その後の保育活動にも以前に増して、有効活用させていただきます。



肢体不自由児施設 重症心身障害児施設
福島整肢療護園

りょうじこ園の低身長
外来について

診療部長 吉原 康



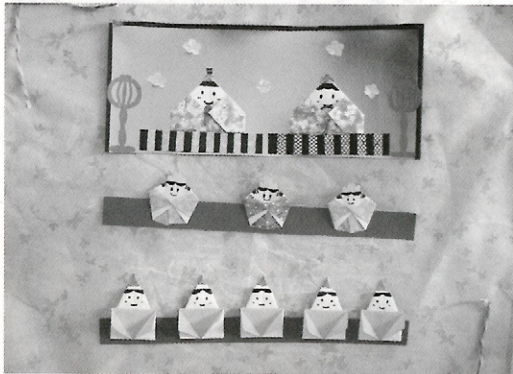
「人は外見ではない。」この言葉には多くの人が同意されるでしょう。では「人は外見で判断される。」胸に突き刺さるこの言葉も、アメリカの大統領に白人ではないオバマ氏が選ばれるまでに二百三十年余りもかかったことから理解していただけるように、明白な真実であると思います。

私がこころ療護園で低身長の子供達を治療するようになって、間もなく丸二年が経とうとしています。現在、月に約七十名の患者さんが毎週火曜、木曜の午後に私の内分泌外来に通院されています。

このお子さん達は単に美容的な面から背を伸ばそうとしている訳ではありません。「二百人中前から一、二番目」くらいの低身長で、しかも背を伸ばすホルモンが足りない「成長ホルモン分泌不全」という状態であることを、精密検査によって厳密に

確認された人達なのです。

治療は毎晩寝る前に、ご家族や、高学年の場合はご本人が、お尻やお腹に成長ホルモンの注射をすることを、数年から時には十年以上に渡って続けます。幸い注射による痛みは殆どないくらいに工夫されていますが、年余に渡る根気のいる治療です。私の仕事は、この子供達が安全に、そして効率良く身長を伸ばせるように治療していくと共に、子供達に元氣とやる気を持ってもらえるよう励まし続けることだと思っています。「人は外見ではない。」ということ



「重症心身障害児(者)通園事業 ナザレ園
お友だち・お母さんたちの作品」

身体障害者授産施設
カナン村

カナン・野の花祭

去年の十月五日、晴天のなかカナン・野の花祭が盛大に行われました。当日は各施設の展示・手づくり品の販売や喫茶・軽食、屋外での模擬店やバザーが行われました。また、ステージでは、和太鼓演奏や映画で一世風靡したフラダンス、そして平四小の伝統芸能クラブによるじやんがらと平一中吹奏楽部による演奏と盛りだくさんで、たいへん盛り上がりしました。ご協力いただいたポランティアの皆さま、ありがとうございました。



し、和やかな雰囲気の中、美味しい料理に舌鼓を打ちました。恒例のプレゼント交換では、ピングゲームで盛り上がり、思い思いのプレゼントを手にし、満足していました。

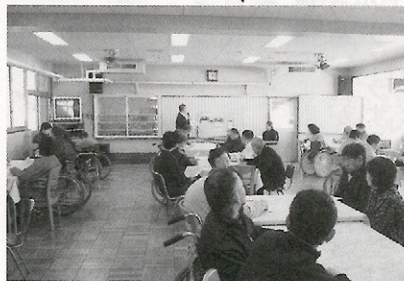


クリスマス会

去年の十二月十九日、クリスマス会がカナン村食堂にて行なわれました。キャンドルサーブिसでは、毎月、聖書研究祈祷会でお世話になっている行川牧師にお祈りとメッセージを頂き、その後、会食を行いました。会食では、ボランティア桐の会の皆さん、行川牧師夫妻をお招き

新体系移行への説明会

去年十二月二十七日、カナン村食堂に於いて、利用者とその保護者を対象に、所長による体系移行についての説明が実施されました。今後、



カナン村は生活介護事業・施設入所支援事業に移行することになり、利用者も保護者も、真剣な表情で話に耳を傾けていました。

知的障害者入所更生施設 はまなす荘

はまなす荘における 地域生活移行について

はまなす荘における地域生活移行は、昨年三月末の五名に続き、第二回目として一月十四日付で、男性三名女性三名の計六名が、ふくいんのバックアップをうけグループホームへと移行し退所しました。

日中活動の場として二月八、九日には、つばさ・かがやき・フルクテン・綴町作業所・ワークハウス・夏井作業所等を自活担当支援員と共に、それぞれ見学しています。

既存の「中平II」に加え、新設された「白土ホーム」へは、今回の女性三名が三LDKのアパートで一続きに暮らす事となります。

今回の移行により、生活寮三、四



福祉サービス事業所つばさ見学



白土ホームの見学



福祉サービス事業所つばさ見学

が廃止となり、三ヶ所になりました。地域の皆様のご協力、ご理解を得て、地域生活移行を進めて参りたいと考えております。今後とも、ご支援の程よろしくお願いいたします。

知的障害者入所更生施設 はまぎく荘

工芸科

はまぎく荘には工芸科・ゴム科・園芸科の三つの作業科目があります。



今回はその中の一つ、工芸科をご紹介します。利用者は総勢十二名。主に牛乳パックを利用した再生紙で葉書や名刺を作り出しています。写真はそのうちの「紙ちぎり」と称して牛乳パックを細かく細かく手でちぎっていきます。パック紙ですので指先には随分と力を入れる必要があります。毎日毎日少しずつ紙ちぎりを行い量を増やしていきます。時々隣の作業科のゴム科の作業の手伝いもします。飽きてしまう時も時々ありますが、その時には隣の人とおしゃべりもします。外を眺めて季節の移り変わりを感

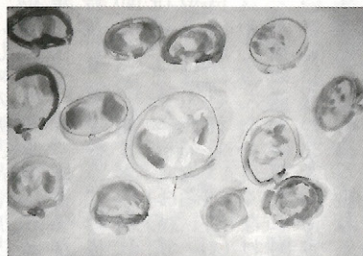


じている時もあります。利用者の方々は自分のペースで作業を進めています。

創作教室

余暇活動としてはまぎく荘では生け花教室・茶道教室・創作教室など各種の教室を行っています。

その中の創作教室は今野先生のご指導の下に毎月一回、土曜日の午後を利用して画用紙のキャンパスに向かって絵の具と鉛筆を持って自由奔放な制作活動を行っています。



たまに教室の活動風景を垣間見る機会があります。色彩感覚や配色に目を見張ることが度々です。物の色、形に拘らない柔軟で純粹な発想には驚かされます。ちよつと見ると何なのか、何を表現しようとしているのか、俗世間の観察眼で見てもいいがちですが、その都度反省して芸術作品に触れる喜びを感じています。



喜びを感じています。

知的障害者通勤寮・福祉ホーム はまゆう通勤寮・古館福祉ホーム

古館福祉ホーム

古館福祉ホームは八月三十日から三十一日の一泊二日にかけて毎年恒例の旅行に出かけました。今年は佐渡でした。一般の人達に混じった旅行で楽しい交流もできました。次はどこへ行くかとの話題はつきま



十二月七日椿山荘でふくいんと同会のクリスマス忘年会があり、全員参加しました。商品もあり盛り上がりました。

はまゆう通勤寮

平成二十年九月十三日から十四日の一泊二日で『雨ニモマケズ風ニモマケズ育てよう明日の自分を』をテーマに東北地区の十カ所の通勤寮の仲間が岩手県花巻温泉に集合しました。はまゆう通勤寮からは寮生十三名、職員五名で参加しました。今回は三つの分科会があり、それぞれが「働くことについて」「生活することについて」「生きることに



ていいます。日常でも地域生活や就労の話題も多く、意識も高まっています。今後他機関と連携を図り支援していきたいと思



議を行い、夢や希望を諦めず、逞しくいきたい。東北の仲間と共に考え、学び、お互いに交流しながら、明日へ活力と元気を貯え飛躍したい。そんな願いを込めた最後の通勤寮大会でした。自立支援法の基に通勤寮では地域移行を進めています。八月三日には六名、九月二十一日には六名が地域移行し九月三十日には一名が施設へとそれぞれが新たなスタートをしました。現在は六名のみですが、地域移行する日まで仲良く、協力しあ

身体障害者療護施設 野の花ホーム

一枚の年賀状から:

今年、当ホームに届いた年賀状のなかに懐かしい名前を見つけた。それは、自分の故郷に新しくA施設ができたため、十年前に退所した利用者Sさんからだ。年賀状には、年始の挨拶の後に担当職員さんの字で「いつも機関誌『野の花』を送ってくださる有難うございます。Sさんは毎回楽しみにしている様です。」と添えられており、Sさんの文字(記号のような)もいくつか書かれてあった。お祭りが大好きで、お祭りの日が近づいてくると自分で作った節に言葉のせて最後に「ヤレヤレ(お祭り)やっぺー。」と歌っていたSさん。そうかと思えば、当ホームから見える水石山を故郷の磐梯山と重ね合わせるかのように眺め「ちゃんちゃん(母ちゃん)来いよ。」と叫んで寂しそうな様子を見せるなど、本当に表現豊かな人だったなあと色々なことが思い出された。この一枚の年賀状から、Sさんに対するA施設の支援の様子を窺い知ることができ、年明け早々温かい気持ちになることができ、物質的・技術的な支援だけでなく、目に見えないことへの支援ができる。これこそ人間としてとても大事なことで福祉のプロだと思った。

近年、年賀状を出す人が減り、メールで年始の挨拶をする人が増えているとのこと。ある時、携帯電話が普及し公衆電話が減ったことに対する中学生の意見が新聞の投書欄に載っていた。「携帯電話を持たない世代の私達中学生やお年寄りには公衆電話が減って困っています。携帯電話を持っていない大人の人達は分からないと思うけど」という内容だった。当ホームにおい



絵: 猪狩純一

も同じ状況で、過去に公衆電話の設置を取りやめたいとの話があったが、何とか一台だけは残していただいた。一方では便利になり、その一方で弱い立場の人々が不便な思いをしている。そして、このことだけでは止まらず、携帯電話やパソコンを利用する子ども達の間ではネット上の掲示板などへの書き込みをめぐり、いじめの被害者や加害者になったり犯罪に巻き込まれたり新たな問題も発生している。便利なものがどんどん普及しこれを扱うことに必死になっている現代。速すぎる時代の波にこのまま乗って行ってしまうのだろうか?少し立ち止まりたい。

自分だけが良ければそれでいいではなく、未来も含めてみんなが良くなければならない。今年の法人の標語「困難と問題を互いに負い合いなさい」は、まさに現代を生きる私達に今必要なこと。私達福祉に携わる者は、もともとと視野を拡張グローバルな視点で一歩進んだ取り組みをしていかなければならないのではないだろうか?

雇用問題・景気回復と呼ばれている今、職人と呼ばれる人達には、何の影響もないそう。それは、こつこつと確かな仕事をしているから。今年の四月、当法人の施設は療養介護を除いて新体系に移行する。職員一人ひとりがこつこつと確かな仕事をしそれが結束することで法人が成長していくことは間違いない。一枚の年賀状から: Sさんありがとう。

生活介護事業所 光の家

クリスマス会



去年の十二月に毎年恒例のクリスマス会を開催しました。開所間もなくは光の家で行っていたクリスマス会も、ここ最近の利用人数の増加に伴い大会場を借りての開催となっていました。一昨年は原点に戻るといって光の家内で行いましたが、今回は光の家十周年ということもあって、パレスいわやで行いました。大きな会場でのパーティーと言うことで、普段とは違った雰囲気を感じていました。

毎年楽しみにしている利用者の方々もいらっしやいます。私たちはその期待によりよく応えるために四月より計画を練ってきました。また十周年という記念すべき年度でもあったため開所よりお世話になった方々にも来ていただき



去年のクリスマス会の際に利用者の方々皆で協力して制作した段ボール製のもみの木などの舞台セットも持ち込み、また新たに作製したものとあわせて会場を賑やかに飾り付けました。内容としてはかねてより要望のあったウエルカムドリンクを用意するなど、なるべく利用者の方々の希望をかなえられるよう工夫しました。

第一部のキャンドル灯火から始まり、第二部のカラオケでは職員を指名してのデュエットを楽しんだり、それぞれが持ち寄ったクリスマスプレゼントの交換などを行い、たった三時間でしたがクリスマスの雰囲気を楽しんでいたただけかと思いません。

皆様のおかげで光の家も十周年を迎え、こうして今年もクリスマス会を開催することができました。これからも利用する方々が楽しめるような行事や活動を考えていきたいと思っています。

障害者生活総合支援センターふくいん

支援センターふくいんのそれぞれの活躍状況の報告です。

ヘルパーステーション「シャローム」では地域福祉における在宅サービスの担い手として訪問介護事業、移送介護事業、居宅介護支援事業の三つの事業を行っております。訪問介護事業とはヘルパーが在宅で暮らしている高齢者や障がい者の調理、洗濯、掃除等の家事サービスや入浴、トイレの身体介助サービス、通院時の付添介助、行事や買い物を援助する移動支援サービスをメインに行っています。現在サービスを利用されている方は七十名程で、家事サービスや通院、移動支援サービスが中心となっています。今後施設から地域で暮らす方が増えることが予想される中、一段と在宅介護のニーズが高まるものと思われま

す。高齢者、身体障がい者、知的障がい者に限らず精神障がいを持った方の在宅支援も高まりつつある昨今、障がいを持ったすべての在宅生活者が充実した、そして満足出来るサービス提供をモットーに、日夜努力しています。在宅生活の困り事相談はシャロームにご連絡お待ちしております。

グループホーム・ケアホームバックアップは、昨年度は主に若い職員が多かったところに今年度は人生経験豊かな職員も配置され、より多角的なサポートが出来るようになりました。また、今年度は八月・九月には、はまゆう通園寮から、二一年一月にはまなす荘からそれぞれ六名ずつ地域生活に移行し、グループホームも鎌田ホーム、後原ホーム、白土ホームの順で三つの

ホームが立ちあがりまりました。時には世話人とのコミュニケーションがうまく取れなかったり、日中活動の場所の通勤路を覚えるのが難しかったりしましたが、今では、皆さんが、地域で生活することに自信も出てきてホーム内でも和気あいあいと過ごしています。

来年度も、何力所かホームを立ちあげる予定があります。物件がなかなかみつからず、くじけてしまいがちな時もあります。地域でくらしたい人、本人の思いを大切にしながら、一人ひとりに添ったサポートが出来るよう職員一丸となって頑張りたいと思っています。

就労・生活支援センターでは、ハローワークとの連携を図り職場開拓に努めるも、百年に一度とも言われている不況の中、事業縮小の企業が増え、開拓、実習受け入れが困難を極めている状況です。就労希望する方がいる限り、関係機関の協力を得、受け入れ先確保に噴騰しています。

また毎年のことですが、今の時期は、卒業を目の前にして進路が決まっていない在学中の方の相談が多くなっています。定期的にすぐの紹介は難しく、訓練事業所等を紹介し本人の働く力を見極めさせていただきながら職場実習受け入れ先を紹介出来るような支援を行って行っています。

「ふくいん」では四つの事業所があります。本人さんを主体に考えた支援を心がけ、職員一同、日夜頑張っています。



今年一月五日より、好間町に開所した「かがやき」を紹介します。「かがやき」は、これまで「つばさ」にあった就労継続B型事業を「福島県障害者自立支援対策臨時特例基金事業補助金」により、場所を好間町に移して



福祉サービス事業所 かがやき
(就労継続B型)



始めた事業所です。

就労継続B型事業は、就労移行支援事業を利用したが、一般企業等の雇用につかれない方や一定年齢に達している方などであって就労の機会を通じて、生産活動にかかる知識及び能力の向上や維持が期待される方が利用する事業所です。

一月末日現在二十四名(定員四十名)の方が利用し、法人施設の環境整備・切干大根作り・公園清掃・花壇の管理等に従事しています。まだまだ仕事に足りない状況ですが、『工賃アップ』を合言葉に、利用者・スタッフ一丸となって頑張っていきたいと思えます。

24時間テレビ・愛は地球を救う
福祉車両の贈呈を受けました

第三十一回目を迎える「24時間テレビ・愛は地球を救う」チャリティキャンペーンによる福祉車両の交付が決定し、(株)福島中央テレビを通してリフト付バス(定員十名)が贈呈されました。十年前、生活介護事業所「光の家」に贈られたひかり号は事業運営に支障を来たすほど老朽化が進んでいただけに、待望の二代目はひかりII号と命名し、利用者の移送用車両として大いに活用が期待されています。



お詫びと訂正について

前回の第14号で苦情解決委員会第三者委員の方々をご紹介しましたがミスプリントがありました。ここに謹んで委員の方にお詫び申し上げます。

改めて苦情解決委員会第三者委員の方々をご紹介します。

小野 清十様 (いわき市社会福祉協議会平地区協議会長)

鴨沢 律子様 (元いわき明星大学非常勤講師)

鎌田真理子様 (いわき明星大学准教授)

石井 重信様 (元東洋学園園長)

馬場 俊栄様 (財)福島県自動車会議所いわき支所業務係長)

委員の皆様には苦情解決のためご尽力下さいますようよろしくお願い致します。



新年を迎え新たな希望を燃やして進んでいきたいと思えます。当法人は今年4月に施設が新体系に移行します。その意味では当法人の新たなチャレンジになるでしょう。今後ともご支援とご鞭撻をお願いします。(M)